

P2-33

翻訳ツール導入に向けた取り組み

長岡赤十字病院 放射線科¹⁾、長岡赤十字病院 人事課²⁾、
長岡赤十字病院 教育研修推進室³⁾、長岡赤十字看護専門学校⁴⁾、
長岡赤十字病院 消化器外科⁵⁾

○小林 潤¹⁾、西潟 貴幸¹⁾、五十嵐一博²⁾、福井 大介³⁾、
平野美樹子⁴⁾、谷 達夫⁵⁾

【はじめに】当院では外国人患者が安心して医療を受けられる病院を目指すため、「外国人患者受入れ医療機関認証制度（JMIP）」を受審することになった。そのため昨年の5月に多言語・グローバル対応委員会が立ち上がり、外国人患者医療対応マニュアルの作成、院内案内・掲示板・ホームページの多言語化、職員向けの英語教育等を整備し始めた。この中で私たちのグループは翻訳ツールの導入を担当したので、その導入経緯、実際の使用経験について報告する。

【内容】全ての職員が手軽にストレスなく使用でき、コミュニケーションが取りやすい翻訳ツールにするため、多言語音声翻訳アプリについては国立研究開発法人情報通信研究機構の「VoiceTra」を選択した。理由としては無料で使用できること、翻訳精度が高いこと、複数言語に対応していること、などが挙げられる。しかし、インターネット環境下での利用が必須であることからポケットWi-Fi 1台も契約することにした。

【まとめ】事前に使用方法の説明会を複数回行ったことで、職員は躊躇なく使用でき概ね高評価をいただいている。また英語圏以外の患者に対しても双方向のコミュニケーションが得られスムーズに対応することができた。しかし、この翻訳ツールの存在を知らない職員も多々いるので、周知を図っていきたい。

P2-35

ネットワークHDDによる手術画像の一元管理

那須赤十字病院 診療支援課

○高橋 慶伍、室井 純一、清水 美子、伊藤 裕子

【はじめに】手術画像記録は医療安全や教育・研究の為にも必要なものであり、昨今、画像記録の保存は手術室において重要な業務の1つとなっている。【現状】当院では術野画像、内視鏡・顕微鏡画像の撮影時にそれぞれの録画機器に取り付けた外付けHDDにて画像の保存を行っていた。そのため医師からの閲覧依頼があった場合、提供までに時間を要し、また外付けHDDが容量不足になるたびに新しく購入していたため、データ利活用の面、コストの面などに問題を抱えていた。【取り組み】低コストかつ利便性の向上を目的として、複数台の外付けHDDに保存されていた画像データを、ネットワーク対応の大型ハードディスク（以下、ネットワークHDD）に移動、データを一元管理することとした。データの回収は人の手で行い第1、第3土曜日の2週間に1度とした。また、手術後に看護師が画像撮影の実入力を行うことで台帳名簿、格納フォルダが自動で作成されるシステムを構築した。【結果】一時的にデータがストックされる2週間を除いては、データの取り出しが容易になり、画像の有無についても台帳にてすぐに検索可能であるため、画像の確認、データの提供を迅速に行えるようになった。また外付けHDDに保存されていたデータは、移動後に削除するため外付けHDDの購入費用削減にも繋がった。【考察】今後は、リアルタイムに近い状態での画像閲覧、画像データ管理の更なる簡素化を実現するため録画機器とネットワークHDDの接続について再検討を行う。また、ネットワークHDDの採用によりデータの破損のリスクは低下したものの依然としてデータ破損の危険性は残されているため、データのバックアップについても必要と考える。

P2-37

動画導入による術前訪問の効果

足利赤十字病院 看護部・手術室

○高沢 和美、齋藤 敬子、柳田由美子

当院では術前訪問の見直しを10年以上行っていない。現在はクリニカルパス用紙を用いて説明を行っているが、方法について検討する必要があると考えた。人員不足や手術件数の増加により術前訪問の時間が取れない現状がある。その為動画を作成し、患者に動画を観てもらい、説明時間の短縮と統一した説明を行うことで、多くの患者に術前訪問を行い、業務改善を図った。

【研究デザイン】アンケート調査

【対象者】手術室看護師32名、術前訪問対象者は、産婦人科、泌尿器科の全身麻酔の同意を得られた患者とした。

【データ収集方法】手術室看護師32名に対しアンケート調査し、訪問時間の測定を行った。

【分析方法】DVD導入前後の術前訪問時間の比較と、アンケート内容を分析した。

【倫理的配慮】院内の倫理委員会の了承を得、婦人科、泌尿器科の対象患者に、文書で看護研究であること、研究の目的や意義を説明し同意を得た。スタッフへは、アンケートは本研究以外では使用しないことでの了承を得た。

【結果】DVD導入前の平均術前訪問時間が10分、導入後の平均術前訪問時間が3分であった。説明が統一できるが84%、重複して説明する必要があるが26%、患者からの積極的な意見が出るが26%、時間短縮ができたが42%であった。

【考察】術前訪問時間の短縮が図れ、重複した説明をする負担が減り業務改善となった。前田延子¹⁾は、動画説明により説明時間の短縮ができ、口頭説明による負担の軽減ができたと述べている。本研究でも同様の結果が得られた。DVDを用いた術前訪問は本病棟でも有効であると考えられる。

【結論】DVDを用いた術前訪問により、術前訪問時間の時間短縮が図れた。DVDが必要と考えるスタッフは80%を超えていた。DVDは統一した説明が行える。

引用文献1) 前田延子：麻酔説明業務の効率化に向けての検討日本手術看護学会誌12巻2号224ページ2016年9月

P2-34

放射線科用英会話集の作成と今後の課題

長岡赤十字病院 放射線科

○山岸 早紀、小林 潤、西潟 貴幸

【はじめに】当院では2017年10月より外国人対応のために多言語対応ユニット(MERU)が運用された。それに伴い、放射線科のMERU担当者で、自部署の外国人対応に備えようと検査時の英会話集の作成をし、完成した。英会話集の作成の過程と使用してみた感想・課題について報告する。

【方法】各モダリティにおいて必要な会話を集めるため、各担当者にアンケートを取り、日本語で書き出してもらい、MERU担当者で英訳した。並行して、中国語もネット翻訳を利用して中国語訳も掲載し、まとめて製本したものを各モダリティに配布した。

【考察】実際にCT検査に来た外国人患者に使用してもらおうと、会話は通じて検査も無事に終えることができた。外国人だけでなく、耳の不自由な方に日本語の説明文としても利用することができたので、幅広く利用できるのではないかとと思う。今後使用していくと、さらに必要な文章が出てくるか予想されるので、その都度追加・修正をしていきたい。他に、検査説明用の文書などの英訳や、当院で新たに導入されたタブレットも活用していくことで、外国人対応時にスムーズに検査が行えるように整えていきたいと思う。

P2-36

診療現場におけるスマートフォンの活用について

さいたま赤十字病院 情報システム課

○高橋 晃成

【背景および目的】平成29年1月の新病院移転にあたり、さいたま赤十字病院（以下当院）では院内の連絡手段を従来のPHSからスマートフォンのIP電話へ切替えを行った。移転に伴い埼玉県立小児医療センターと併設されることから、診療の連携強化のため、双方の病院を繋ぐ手段としてIP電話の導入が決定したためであった。通信手段の切替えの検討と並行でスマートフォンを導入するのであれば、その機能を診療現場で撮影された画像管理の統一化に活かすことができないうかが検討した。【方法】先に導入済みであった電子カルテ内の画像ファイリングシステム（Claio）へスマートフォン内の内蔵カメラで撮影した画像を送信し、取込むデジタルソリューション（以下ID-Cam）の導入が決定した。【結果】診療記録としてカメラ撮影が必要になった場合、撮影したデータをPCやサーバへ取込むためには、USB接続を院内で許可されたカメラを使用するか、許可された外付けの記憶媒体で移し替える必要があった。また、データを取込んだ後、患者別にデータを振り分ける必要があるなど手間が掛っていたが、ID-Camを導入したことにより、カメラ撮影が必要な場合は手元のスマートフォンで撮影を行い、そのデータを電子カルテの該当の患者へ、IDを指定して送信し画像ファイリングすることが可能となった。また、ID-Cam内の画像は一定時間経過すると、自動で削除される仕組みとなっており、画像データの移動も直接電子カルテへ送信することが可能なため、情報漏洩のリスクも軽減できた。【結論】当院でのPHSからスマートフォンの切替えについては診療現場の負担軽減にも一定の貢献はできたと考えられる。今後はさらなる電子カルテとの機能連携を目指し、診療現場におけるスマートフォンの活用方法について検討していきたい。

P2-38

赤十字脳神経外科Web Conferenceの現状：アンケート調査から

静岡赤十字病院 脳神経外科

○天神 博志、川勝 暢、徳山 勤、齋藤 靖

【はじめに】全国に広がった赤十字病院脳神経外科の交流を目的として日赤脳神経外科カンファレンスが開催されている。その後援を受け赤十字脳神経外科Web Conferenceを行った。今回アンケートを行ったので、その評価について発表する。【方法】使用機器は各赤十字病院のPC、ネット環境、本社より配られたLive onシステム、年4回、曜日ではできるだけランダム、夕方の時間帯に1時間、回毎にテーマを決めた。動画はファイルの形式を統一するため静岡赤十字病院に送っていた。その後、DVDで各病院に配送した。現在まで合計8回のWeb Conferenceをおこなった。【結果】13施設、37人よりアンケートが回収できた。脳神経外科の知識を得るのに役立つ(92%)、他地域の医療を知るのに役立つ(86%)と参加した施設、回答者では何らかの形で役に立つとの回答が多かった。しかし一方で地方レベルの会を増やす必要性はないとの批判もあった。【考察】アンケートの結果を踏まえカンファレンス内容を改善中である。アンケートがいかにされたかどうかについても検討したい。【結論】全国に広がった赤十字病院間での交流には工夫が必要である。Web Conferenceは赤十字病院間でのカンファレンスの時間的・財政的制約に対して大きな役割を果たす可能性がある。